

## 二 一世紀前までの釜ヶ崎は

まだ、のどかな田園地帯であった

昭和四十七年のNHK日曜の大河テレビドラマは、吉川英治原作の「新平家物語」であった。そこでは平清盛が「宋」と交易を行なうため、摂津国福原で精力的に港を開いていく下りがあった。「宋」とは唐滅亡半世紀後に誕生した国で、摂津国福原とは現在の神戸市一帯を指す地名である。今日、神戸市の新開地隣接地に「福原」と呼ぶ旧遊廓街があり、いまでも西成の飛田と同様、夜になると赤いネオンが点滅し売春行為が行なわれている。平清盛が晩年、幼い安徳天皇を擁して遷都したところは、この福原から海辺に寄った現在の国鉄・神戸駅東側だったともいわれている。

平清盛が福原で貿易港を構築することにしたのは、かつて国際港として大役を果たした難波津

が上手から運ばれてきた土砂によって陸地化がすすみ、那具の浜はすでに船舶の接岸が困難な低湿地帯に変わっていったからであろう。仮に那具の浜が港湾としての使用に耐えるものであったとすると、都からはるかに離れた難波よりさらに遠い福原の地など選ぶことはなかったはずである。これで、源平の時代にまで下ると難波津はせいぜい塩の生産地ぐらいにすぎない土地であったことがわかる。

「おごれる者久しからず」の例のとおり、やがて源平の時代に幕が下り、北条の時代が訪れると、西成一带を「摂津国百済欠郡」と呼称することになる。そして、人々からも全く忘却された「欠郡」という、地名も定かでない地帯となっている。『今宮町志』によると今宮戎神社に残っている繪旨えんしに、文永十一年（一二七四年）、蒙古の大軍が嵯峨、対馬を侵略し、筑紫に上陸したといわれるころ、釜ヶ崎周辺のことを「津江の庄」と呼んだと記されている。それは今宮戎神社の宮司が「津江氏」であったから、このように呼称されていたらしい。このようなわけで、この時代にはそれほど顕著な動きが見られないのである。

南北朝の時代も過ぎ、足利末期にもなると、いわゆる応仁おうにんの乱で近畿を中心に諸国が乱れ、これによって今宮、木津、勝間を中心とする浪速、西成一带は、大阪湾から摂津国に入る軍事上の要衝の地となった。その一例が享祿三年（一五三〇年）、足利幕府を支える管領家の継嗣問題を



お仕置場の本尊であった首地藏

街道を下って堺を訪ねたり、住吉神社に詣でたりした。そして、その途中で釜ヶ崎に近い、西成区天下茶屋三丁目にある天満宮紹鷗社付近の茶屋でよく休憩を取ったといわれている。その茶屋がやがて殿下の茶屋、すなわち「殿下茶屋」というようになり、後になってこのあたり一帯が天下茶屋と呼ばれるようになったことは、すでに語り尽くされているところである。

豊臣時代、釜ヶ崎一帯は「摂津国西成郡鵜田（飛田）」と付され、荒陵寺（四天王寺）の墓地であったといわれている。このことは現在、西成区太子一丁目（旧東田町八〇）、すなわち霞町の交差点から今池町方面へ約五〇メートルほど行った右側の地点に「旧蹟今宮飛田太子地藏尊」が立っているが、この地藏尊の右端に高さ二・五メートル余り、幅一メートル余りの「開宗廟」としての御影石の碑があり、それに次のような文が刻まれていることでもわかるのである。

《開宗廟》

西生郡鵜田之地者荒陵寺之所葬地遭慶長之義戦盡為荒墳矣 呼呼先世之丘壟今焉

めぐって、四国阿波の細川高国が摂津攻めを行ない、実弟の長男にあたる細川晴元と戦ったときのことである。これが釜ヶ崎周辺が戦争で荒らされた最初のできごとであろう。このころ、西成付近のことを「欠郡今宮庄」と付されたというが、この今宮庄が後に今宮村として継承されたのではない。

足利末期から堺の商人たちが「明」などの国と交易で発展しはじめたので、大坂（大阪）と堺を結ぶ住吉街道が開通した。それは日本橋から長町、今宮札の辻、今宮新家、天下茶屋、安立を経て堺に至るルートである。外国の珍しい商品はこのルートによって、商都・大坂の町に運び込まれた。現在、この街道は釜ヶ崎の中心部にある西成警察署前を南北に走っているが、いま住民からは「釜ヶ崎銀座」と呼ばれて親しまれている。また、新聞などでは騒動が起きるたびに「旧住吉街道」とも、「旧紀州街道」とも記されて紹介されている。

天正四年（一五七六年）、天下統一をめざす織田信長の軍勢が、大坂の石山本願寺攻めを行なったとき、毛利元就の水軍は現在、西成区と大正区の境界となっている木津川河口から兵糧を送って、本願寺門徒を助けたのである。摂津国への上陸地点であり、田園地帯でもあった西成一帯は、こうしてしばしば戦場と化して荒らし尽くされたのである。

織田信長に代わって天下統一に成功した豊臣秀吉は、しばしば茶の師匠・千利久ちんりくを従え、住吉



は多分、庭に萩が生えていたので、後に「萩之茶屋」と呼んだと思われるが、この粋な屋号が、二〇〇年も過ぎた今日まで残って、「萩之茶屋商店街」という商店街名となったり、「萩之茶屋」という新町名にまで起用されたりしているのである。

徳川中期から末期にかけて、釜ヶ崎周辺のことを「摂津国西成郡今宮村」と呼んでいた。そして、今宮村は津守村との村境から現在、電化製品の問題が軒を連ねている浪速区日本橋三丁目あたりにおよぶ、かなり広い地域からなっていた。しかし、長町四丁の細民街を除いて、人家はわずか一〇〇軒足らずの寒村であったという。『今宮町志』によると、当時の今宮村の農地面積は一一四七町五反八畝二歩、石高は一八六四石八斗二升と定められていたと記している。制度としては庄屋五人組制が敷かれ、庄屋は代々、主として伊藤家が継いでいた。

寛政二年（一七九〇年）、何代目の庄屋かは明らかでないが、伊藤勝右衛門という頭のよい人物が、「この地の者は平安時代から、朝廷に新鮮な魚を贈り、祇園神社に奉仕して、租税が免じられていた」という理屈をこねて、公租夫役の免除を申し出ている。そして、その二〇年後の文化六年（一八〇九年）、時の代官、篠山十兵衛の取り次ぎで、大幅な免除が行なわれ、以後、今宮村民は著しく租税が軽減されている。

幕末の今宮村は畑場八か村（難波、木津、今宮、西高津、勝間、中在家、今在家、吉右衛門肝

場と違って晒し首場であり、権力者にとってのいわゆる極悪人の処刑が行なわれていたという。郡界作氏の研究によると、現在、阪界線と国鉄環状線が交差する付近に、松の木が二本立っていて、そこに一里塚があり、この一里塚から南、すなわち今池方面へ五、六〇メートルほど行った、阪界線東側に刑場があったとしている。そこに例の俗にいう首地藏といわれる「旧蹟今宮飛田太子地藏尊」があるわけだが、当時これを取りまくようにして無数の無縁墓が散在していたといっている。さらに、郡氏はこの太子地藏を中心に東西五〇〇メートル、南北四〇〇メートルが、後に「釜ヶ崎」と呼称されるようになったという説を持っている。いずれにしても、徳川中期にお仕置場としたことが、明治末期になってスラム街となる一つの大きな要因となつたと見てよからう。和歌山に通じる「旧住吉街道」、または「旧紀州街道」といわれていた街道は、この太子地藏がある刑場の西側、約二、三〇メートルのところを通っていた。これはまた徳川時代に江戸幕府と紀州徳川家を結ぶ天下の街道でもあった。通行人も多かったため、天明の大飢饉の結果、生まれた犯罪者の見せしめのための刑を行なうには手ごろな場所であったに違いない。寛政七年（一七九五年）、この街道に沿って太子地藏が立っているところより南へ三、四〇〇メートルも行つたところに、萩之茶屋の南北両店が開店している。この茶屋は鴻池家の未亡人が淡路西浦という太夫に建てて与えたもので、堺、住吉方面と往復する人たちの休憩所となっていた。この茶店に

處地」といわれる蔬菜地帯の一部として、綿、麦、ねぎ、人参、甘藷などをつくり、天満市場を経由して大坂の市街地に供給していた。また、今宮村の村域にあった、現在、日本橋三―五丁目にあたる長町四丁目には、分銅河内屋、瓢箪河内屋という屋号の旅籠があり、そこには日雇人夫、大道芸人、巡礼、生活困窮者など、数百名が寄宿していた。さらに、このあたり一帯に畳も敷かない、貧しい長屋が軒を連ね、そこには敷え切れないほど多くの貧しい人たちが居住していたという。そして、恵美須町にある広田神社付近には全く人家はなく、樹木が社を取りまいていた。ずっと南に下って釜ヶ崎付近までくると、旧住吉街道の東側に高さ一メートルくらいの高き堤があり、飛田刑場には涼み台のようなカタチをした櫓が立っていたという。このあたりをこの間まで「東田町」と呼称していたが、幕末には「字東道」といって墓地であり、地下鉄動物園前東出口を出た飛田本通りの入口にあたる山王町一丁目付近を、「天王寺村字墓の前」と呼称していた。ジャンジャン横丁で知られている「新世界」あたりは、「字小墓」といい、狐や狸なども出没する荒地であったともいわれている。そこは雑踏と喧騒に明け暮れる今日からすると、想像もつかないほどのどかな田園地帯であったといえるのである。

明治元年（一八六八年）、徳川幕府の崩解とともに大阪には鎮台（陸軍司令部）が置かれ、大納言醍醐忠順卿が長官として就任した。この明治維新によって摂津国は大阪府に変わり、以後、明治の全年代を通してここは「大阪府西成郡今宮村」と呼称されることになる。そして、釜ヶ崎は現在の愛隣総合センター付近を指す実際に存在した字名であり、そこは「今宮村字釜ヶ崎」という地名で呼ばれていた。

明治四年（一八七一年）、旧住吉街道の入口にあたる長町四丁目には約一万人の貧しい人が住んでいたが、ここにコレラが発生したため、大阪府知事は長町表通りの木賃宿を取り払うよう命じている。翌明治五年（一八七二年）三月一日、この長町四丁の地名が改称され、長町六―七丁目の一部が日本橋四丁目となり、長町七丁目の一部と八―九丁目目が日本橋五丁目と定められた。同年五月二十二日には新政府の行政改革により、庄屋五人組制が廃止され、代わって太政官第一八四号をもって戸長区長制が敷かれ、今宮村では名門の伊藤勝右衛門が初代戸長に就任している。

明治六―七年（一八七三―四年）には四天王寺の埋葬地であり、大阪の七大墓地の一つでもあった飛田墓地が整理され、そこにあった墓は新たに設けられた阿倍野斎場に移されている。今日、墓地として名高い阿倍野斎場は旧飛田遊廓南側の隣接地にあるが、実はこうして誕生したのである。しかし、その後、十数年間はそれほど大きな変化がなく、わずか二〇〇戸足らずの農家がここかしこに散在している寒村にすぎなかった。

さらにその後のことについては、『今宮町志』がおおよそ次のように記している。明治十八年（一八八五年）十二月二十九日、難波と大和川（大阪市と堺市の間を流れる川）間に南海電鉄の前身である旧阪堺線が開通した。明治二十一年（一八八八年）四月二十二日、市制および町村制が公布され、翌明治二十二年三月二十二日、大阪市が誕生するとともに今宮村でも府令第十四号に従って村役場を設け、そして村会制を敷き、村長にはそれまで戸長をしていた伊藤勝右衛門が就任している。この年の五月十四日、後に国鉄関西線となった大阪鉄道株式会社が、河内の柏原と難波に近い湊町を結んで開通し、列車が今宮村の北部を横切ることになる。大阪の南部はこうして急速に鉄道網が敷かれ、国内の新植民地としての準備が急速に整備されていく。

明治三十年（一八九七年）四月一日、大阪市の接続町村編入実施で関西線以南の今宮村の村域（南口、田中、札の辻、広橋、油小路、宮前、檀原、貝原、町裏、関谷、手ヶ口、高岸、山之鼻、神宮地、高辻、水田）が、大阪市に編入された。そのとき残されたのは関西線以南の今宮村の民家一三六戸、人口約七〇〇人であったという。分割された今宮村では、村益を考え近くの津守村と共同して、今宮津守組合役場を設立することになる。それでも当時の両村の戸数は合わせて二〇〇戸に満たなかったというから、釜ヶ崎とその周辺はまだかなりさびれた地であったに相違ない。ところが、日清戦争で勝利を収めたわが国の資本主義は、まだのどかな田園地帯であった大阪

の南部を大陸進攻の基地とするため、新たなプランを打ち出している。そして、この年の十二月十五日、旧阪堺線（南海電鉄）を住吉から堺まで延長させ、交通網の拡充をはかっている。ところで、明治三十年に発足した今宮津守組合村政は、今宮と津守の間で意見が異なりはじめたため、日露戦争がはじまる前年の明治三十六年（一九〇三年）三月一日、両村は再び分離している。これはうがった把え方かもしれないが、この年の三月一日から七月三十一日までの四か月間、釜ヶ崎に隣接する天王寺村の一角にある荒地で、大阪では初めての第五回内国勸業博覧会が開催されているが、このことと両村の分離は、全く無関係とはいえない。また、行政当局では長町四丁の住民が釜ヶ崎に移住してくることに、今宮村から暗黙のうちに了解を取りつけていたと思われる。

さてこのころ、やがて釜ヶ崎に移される長町四丁（日本橋三―五丁目）の様子はどうなっていたのだろうか。明治二十年ごろ、桜田文吾という人が書いた『貧天地飢寒窟探検記』にもとづいて、柴田善守氏が「月刊ボランティア」（大阪ボランティア協会・機関紙）に連載している「大阪の社会事業史」によると次のように紹介している。

長屋の一戸は二帖から四帖の一室で、一日の家賃は一銭二厘から二銭五厘であり、一日でも滞納すれば、どのような事情があっても追出されてしまう。長屋は共同の井戸、炊事場、

便所がある。この便所にたまる泌尿は近郊の農家に肥料として売却し、大便の方は家主、小便の方は借家人に配当された。

さらに、柴田氏は行政当局の貧民対策について、次のように批判している。

この地区ではたびたび伝染病が発生する。発生すると衛生事情が悪いためすぐ蔓延する。このとき大阪市の衛生当局ではどのようにするか。「名護町（長町）一窟の虎列刺病は実に茶毒を極むるに由り、其裏長屋の一軒に之が発生すると見る時は、当局よりは直ちに人を派し先づ長屋の総入口を点検し、之に数日間の糧食を給与することを告げ、巡查を隧道的出入口に派して、蔽に他との交通を遮断する事となりおれり、其間此裏に閉塞されたる者の危険さ幾何ぞ」と桜田はいう。隧道的入口とは長屋に出入りするには、家主の家の一部がトンネルのようになつていてここを通らねば長屋に入れない仕組みになつてのをいう。ここで家主は日家賃をとるのであるが、伝染病発生と同時に、長屋の住人の中にとじこめてしまうのであった。このようなやり方が、当時の行政当局の貧民対策を見事に表現しているといえる。

いま、時代の先端をいく電化製品の町として繁栄している日本橋筋が、かつてこのような残酷なスラム街であったとは、だれが想像できるであろうか。

さらに明治三十年ころ、横山源之助氏が書いて岩波文庫から出版した『日本の下層社会』の第一編には、長町四丁について次のようにスケッチしている。

昨年八月、大阪に遊びて大阪の最闇暗なりと称せられたる名護町を視、之を毎日新聞社に報ぜしことあり、付記して参考に資す。

大阪市にて最も繁華の地なりと称せられる心齋橋通を過ぎ道頓堀に出で候はば、難波新地（遊廓）を傍らにして今宮村に通ずる大路有之、是ぞ大阪市民になが町と呼ばれ常に忌み嫌はるる大阪貧民の住居地、日本橋通に候。名護町、大阪に初めて来る者にして名護町の事を質せば、単純なる市民は孰れも月世界の事をきかれたるが如く奇怪なる面色をなし、ぢろぢろ問者の顔を眺め、後ち声を潜めて六、七年前の名護町の状態を語り候が通例に候、七、八年前の名護町といへば、路上を往来するだも鼻を蔽はざれば能はざりし程の醜穢なりし由に候へば、大阪の如き現金にして物質的なる土地にては貧街と一種特別視すること寧ろ度に過ぐるは固より其咎なるべし。然る處今日名護町に到り見候へば、偽善を售りて裏長屋に比して寧ろ清潔なるは其の上に可有之歟。

かくの如く、名護町の面目を改めたる警察衛生の当局者が尽力によりしも多かるべけれど、寧ろ各種工場の起こりし庇蔭によりしもの興りて多からんと思はれ申候。但し名護町の面白

以前に叱して一変せりといふも、名護町の貧民が大坂の社会に消滅せりといふにあらざして、其の半ば場所を変じて今日は天王寺村、今宮村、難波村の各所に移りて第二の名護町を作りつつあり、浜の真砂は絶ゆるとも世に貧民は消滅せず、……もしくは千日前裏なる難波石垣浦の如き万年町浅草町の裏に住めるカッバラヒの者流は群をなして生活す、皆な是れ旧名護町の面目を移して此處に示せるものよしに候、もしくは名護町の一部なる日本橋通五丁目路次に入れば、路次に広く家屋は概ね新らしけれど、年若き女は前垂を下紐に代へ真ッ裸体になりてどすくろき脣を開いて語らへるもあり、此のあつさに裕の破れたる細帯せる顔真青なるが悄然路上に立てるあり、大坂裏面の消息を天幅の裡に掬するを得るもの多々見受けられ申候。

大坂市中には木賃宿なけれど難波、今宮、天王寺、川崎、曾根崎、北野、福島、三軒屋の各郡村には木賃宿を見受く、但し東京のやうに群集せるはなきやうに候、総木賃宿数二十八年の調査によれば百〇四戸、二十七年に比すれば十一戸を増せり。総じて生存競争の激しき土地なるにも拘らず、工場地というにも拘らず、各種の新事業新に興りて労働に払底せる故にや、貧民状態は東京に比して甚しきを寛えず、思ふに貧街の清潔なる市政が能く貧民に注意せる故と存候、勿々。

今宮村に属していた明治時代、長坊とも呼んでいた長町四丁（名護町）には、働ける人口はおよそ一万人を数えたといわれ、性別比は男四一パーセント、女五九パーセントであったといわれている。職業はくず拾い、煙管すげ替え、偽順礼、偽法師、鑄掛師、芸人、人夫、豆腐商、磨砂売り、下駄齒入れ、鉛売り、売春、バタヤ、マッチ工、先曳（坂道で荷物の先を引く手伝い仕事）などが多かったらしい。また、長町四丁は界筋に面し、住吉街道の入口にあったので、きょうは住吉、あすは天満へと、仕事のあるところへはこの道路によって、自由に赴くことができたのである。さらに、女性が男性より多いということは、貧しかったが世帯持ちが多く、比較的定着したカタチで居住していたことが考えられる。

当時、長町四丁には長屋が多かったが木賃宿は少なく、日本橋五丁目付近に二軒あっただけで、その一軒は二階建てであり、屋号を「山本」といった。この宿はランプを点じ、当時としては珍しかったといわれているが、宿代が一銭五厘（当時の平均は三銭五厘）、三畳の小部屋に五人も並べて寝かせていたという。そして、枕元には小便桶を三桶も並べて置いてあったため、部屋中に臭気に満ちていたともいう。また、長町の住民の暮らしはあかに汚れ、しらみやのみの潜む衣をまとい、洗うに更衣なく、食うに「めし」なしといったきびしい状態であったと聞いている。

徳川時代初期に大坂の町づくりの一貫として権力に都合よくつくられた細民の町・長町四丁が、

その後、どうして釜ヶ崎に移されたかについては次の章に譲ることにしよう。ただいえることは、釜ヶ崎というところは資本主義社会が生んだのではなく、封建社会においてすでにその芽生えがあったとらえることができるし、資本主義がそれを肥大させる役割を演じたと見ることができるとはなからうか。同じことが東京山谷の場合においてもいえるし、それがわが国スラムの特質といえることができると考えている。

### 三 日露戦争の前の年 いわゆる釜ヶ崎が誕生した

昭和初期、大阪市役所が発行した「大阪市不良住宅地区沿革」と題した資料によると、釜ヶ崎について次のように記している。

現在の釜ヶ崎密集地域も明治三十五年頃までは、僅かに紀州街道に沿う旅人相手の八軒長屋が存在していたに過ぎない。

その後、東区の野田某氏が始めて、労働者向きの、低廉なる住宅を建設して、労働者を収容したるが、尚當時に於て依然として、百軒足らずの一寒村に過ぎなかつた。

以後、大阪市の発展に伴ひて、下寺町広田町方面に巢食つてゐた細民は次第に追ひ出されて南下し、安住の地を求め、期せずして、集団したるが、現在の釜ヶ崎にして、そこに純長